茶湯早合点　上

472

茶之湯真之臺子巻之二

三重大逆勝手真の手前弐具足飾

三重大逆勝手真の手前左應答

一重半順勝手出炉古の手前

一重半順勝手出炉取の手前

一重半順勝手角炉古の手前

一重半順勝手角炉取の手前

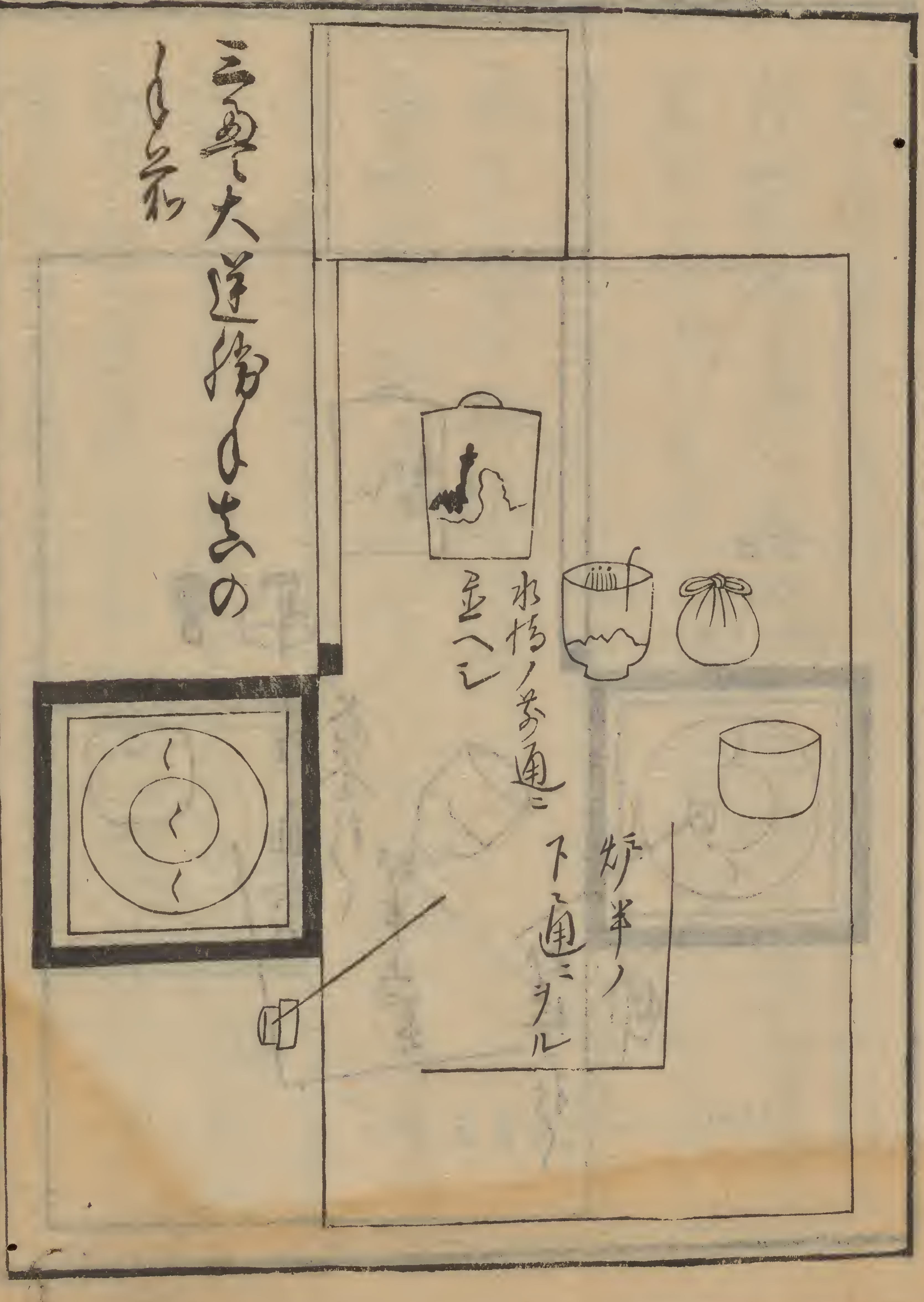
一重半逆勝手出炉古の手前

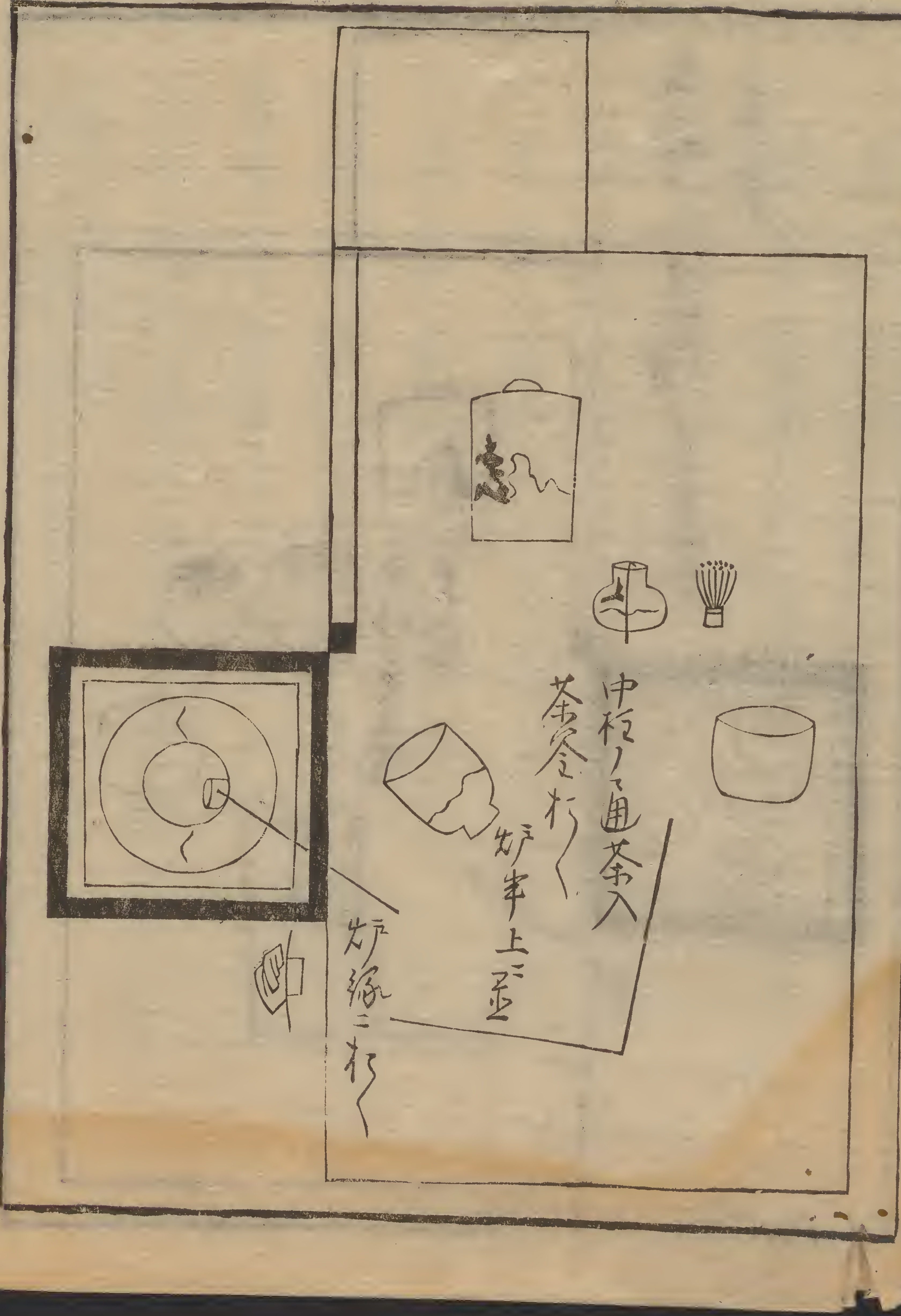
一重半逆勝手出炉にして手前

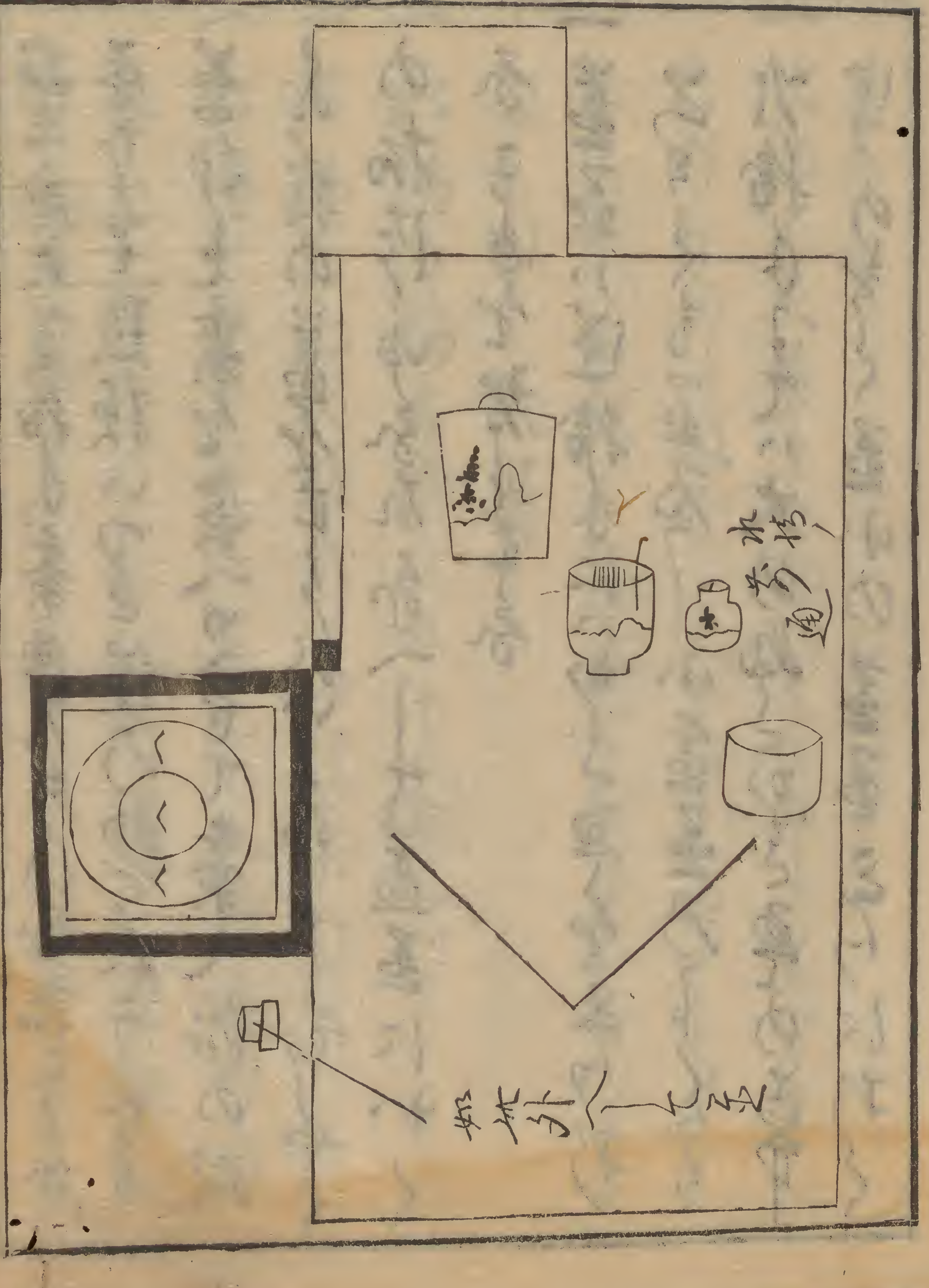
一重半逆勝手角炉古の手前

一　四畳半逆勝手角炉にて置合

一　四畳半逆勝手出炉台子の置合右会釈




中棚ノ通茶入
茶盌右ノ
炉中上ニ置
炉縁ニ右ノ


水指ノ

右三ッ共大逆勝ニ条曲尺あひ易記よろしからず
逆なるを蹉跌といふ逆乃ぬきたるなり
其故ハ裏を宮へ入させて条之治の附
手指の其を出すにいまたよくもしやく
の指法の中ふ有かへして蓋壺にかく
取ニうちを背しとす

一 蓋壺ハ逆勝ふにハかざる事を云おも
しろくも壺あし小蓋壺乃やうなり
此勝にさて八大の娘とかさ事の本中
四メのおく壺小の蓋壺三ツにおく

壺なり

一 此勝ふに笑といふかざりなし其ノうち之
太のすれし故なりしむ曲尺おこしとく
易乃爪ふ記して蹉跌と云事ま去乃ふ
あふ同し故略ふて

一 水指の勝ふ貳メのけ条一ツ

一 水指の向門勝貳メのけ条一ツ

一 水指を常の爪に壺蓋入勝ふ乃方
壺て同二メのけ各指乃通小壺前み
竹端をきすみ多のをおれ下ひの

一 を茶わして置べし
一 右柄杓蓋置ハ置向(ムカウ)乃風炉先窓(マド)の
蓋并揚子乃方七寸のけ柄杓の
かゝをうつむきかけ柄杓柄先ちか
き一寸ほど袋入の茶入をかざること
一ッ
一 下棚乃ちか中ハ袋入の茶入おくこと
一ッ
一 下棚に柄杓かゝをうつむき筋かへて柄先
出し置こと一ッ

一 上棚ハ香(カウ)炉(ロ)火をそれ銀だん我伽羅(キヤラ)置
下ハ右柄杓蓋乃ごとくにかざる
一 下棚よ柄杓うつむきを茶碗茶入二ッと
ちに蓋置もとる
一 柄杓を風炉先まへにうつむきを柄の下に
竹輪一寸ほどのけおくこと一ッ
一 そうくと中志(ず)まいの茶入竹輪と中
柱乃縁ハ置べし
一 茶お柄杓かゝをうつむけ右揚にかけ
置蓋置こと一ッ

庭のちりくらハあしたにゆふべにも
つきはけきよくとゝのへてよし
数寄の座建るにハ床の間ハ書院つくり
切ておくこたつよりれをかし
会（クヮイ）席（セキ）にはけさうけおもてより出すものそ
汁ひとさめにくかうのひとつにてよし
冬ならば炉をひらきて香を炷
出しくあらしよ絹ふきくきく
次乃まにハつゝましく人つきてよし
茶釜 茶巾をならべくれてよし

次乃間にてさうぞくひきつくろひおきて
花いけをあらためてよく心えてかし
客あるに茶をかけおもてよりまの
炭乃時分は人おしかけ多く
風炉先のすだれとをつけてあんを
〇ゆてらひ待をおうかゝよし
御亭主あるじすだれとをつけ八せあそ
露地がかゝりて主のめいりく
客人ハ板戸のあけはなれてや
月のあかりの見えてよろしぞ

かみのゆひやう
ゆりえさゆひ
こころはもこころ
こえしかく

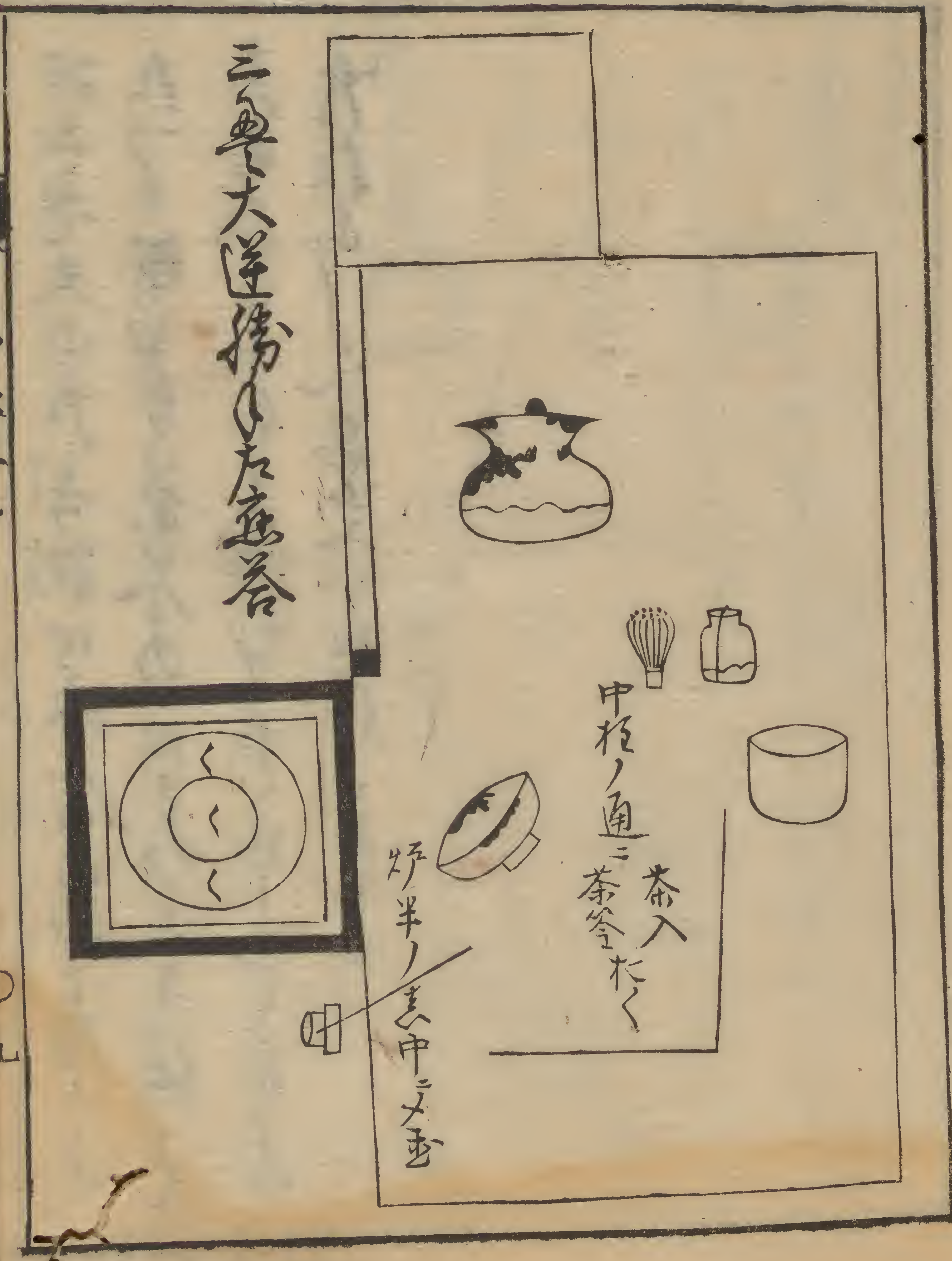
うやふきの板行の藤(ヨシ)一きも孫
一きれはしふりひあきたり
入りや乃そうまこし枝能法けり
これ定まりたるものとしるべし
入りやの中に柾ありて外へ入堺
かくあるべきにてそこにかくなれ
かやふきのみねのくずれかしとえひ
羊にてつまりてるへおく為し
くねの尾へ竹三本でつ結し
けしびなるにかくしきをてすれ

今乃世にて香湯に入まうれ物を
小さき皿にまぜて角にあくべし
もれ沸こしかけ乃新に汁つけて
西つり時にて男に見せかつ継て
又松葉にかしこ葉をまかる武法を
松乃下は毎(ゴト)に敷作るとの為に
菜湯庭にてかへすひえる入れと
作りまなしはのそく為になり
茸一本竹とうへかかるようにとのそ
女竹(ダケ)志の竹(メ)組(クミ)笹(ザサ)もよし

芝を好み小松をうへてきつくよ
おもし流く入へて京もよろし
石だんを八寸のをく松葉しく
これをうへにとまゐそかし
手水鉢脇の湯桶乃すへいしよ
冬はかかへ出入ねそかし
刀かけつくへうつし出ひらつま
はしりたるかきせねこしそか
ちりを穴乃下の松葉の山へ入てよし
よくみかきて葉ふかにまれてよう

石ひろき流しゃかりてにおくねて
手水鉢乃きわへ一入乃京
そうしんを
みら七つめ
きつえまつかく
月夜して
風乃ちがひ
なりきまり

月乃夜ハ
七節いまく
ねうつまよく
月のあかりで
みはくきとの



右三畳大の左台目構ハ四畳半の心と同し之
たつる所ハ茶釜の置さまに依て
左あひしらひと細訂しやくしやくれみ
此外ちらし之事文ハ口傳にあり

是までなしとぞ中古乃開山千利休
宗易居士乃臺子なく侘人の茶の湯
なるゆへ是をさけて臺子の寸法の格を
もとゝして其格を弐ツに切て風炉
の大板とし大板風炉を炉にきはめ
四尺七寸三分の下より長尺四寸四分
の炉とりて長さ寸八分乃板無を入居
無き中無も長無の無をかへ一無さすの
座敷さつらい臺子乃長寸の格をのこ
し弐尺弐寸よ引竹を入弐寸の棚

と侘茶乃湯を初て大板に一無き平
乃兄弟は此道の始より有炉と又是炉
を何ぞ是れ臺子の風炉の並べ是炉
ならんなり
一 弐室乃棚に口伝有ても弐尺弐寸乃
引竹に臺子乃長ケ弐尺弐寸あるを
以て引竹のあるさし定
一 中棚を曲柱といふ弐尺弐寸に而
まつるに臺子乃寸法をぬいて乃仲人
爰中のく八寸に旬し上八棚のかこひとも

乃心ゆかべき事なり

一 此炉を世ゆ法切きるといふ又向點(ムカフダテ)

といふなり白人(シロウト)の云なる事なり風

あて八右の心也人ふさるきはすりといふ

一 點前を主不可法なり記せす家ゆ密なる

所作得はあるみなし作のあれあつかひなし

不あてや習し口傳ゆあり

一 まはすは炉にても炭乃蔵らかれゆ

風炉の山炭らしふくかりなり

一 まはす炭乃時ふも炉乃方より

そのまゝ炭かしうをて利へし

其炭を前と何ゆおかしとみえ

らうり炭ならしなあつかいゆせよ

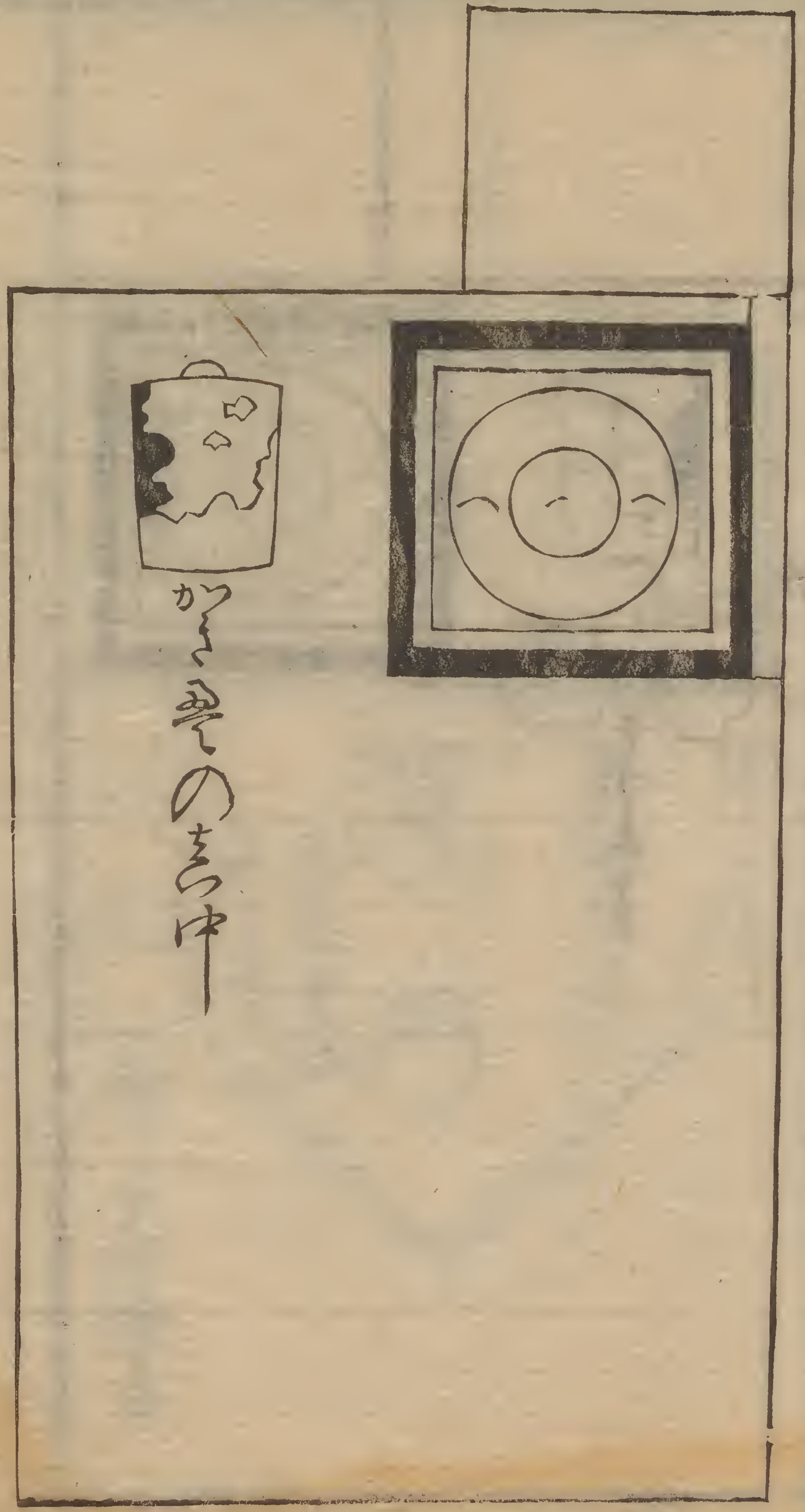
細(ホソ)炭(ズミ)をもさらに入てよろりのそ

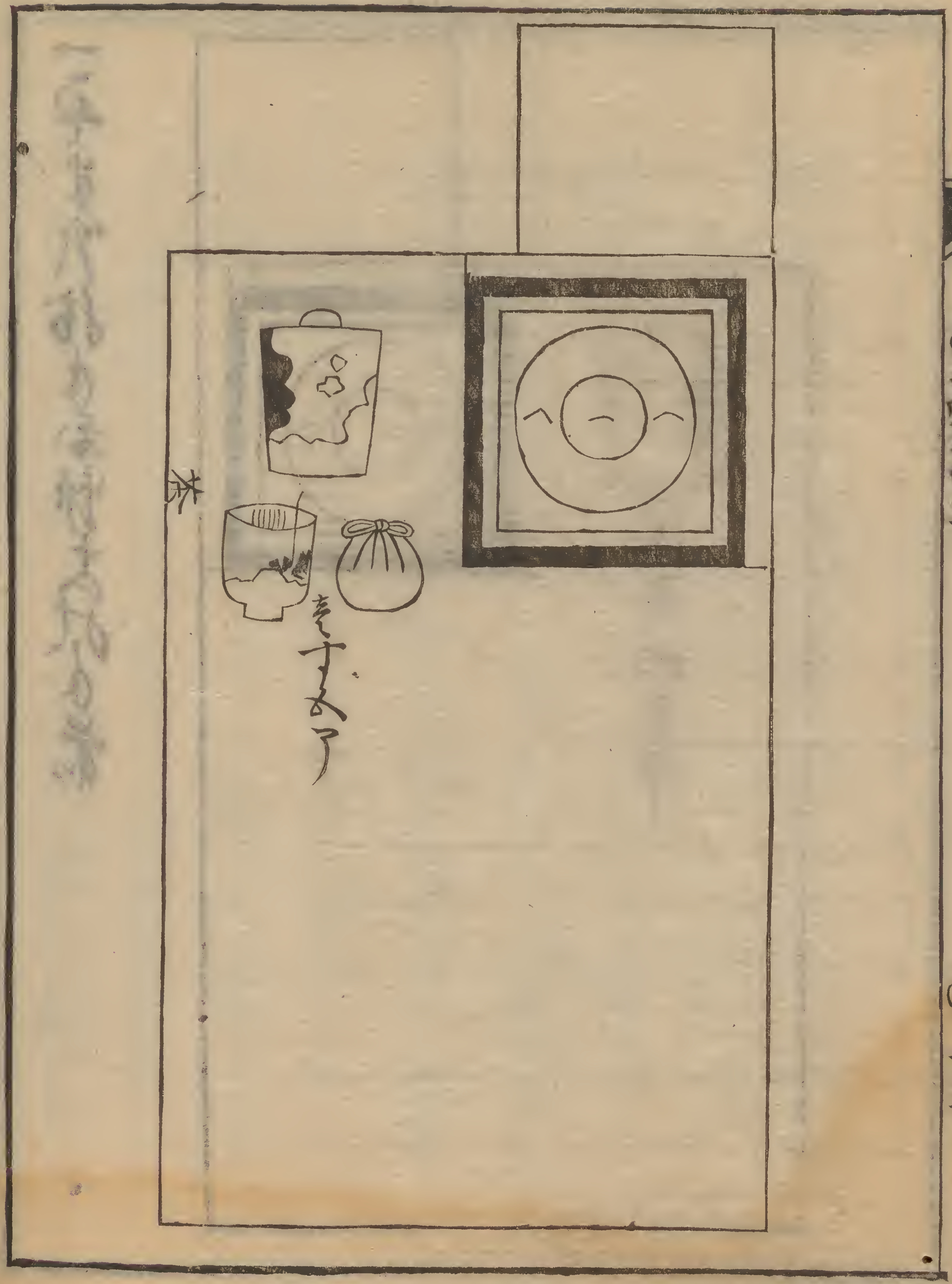
炭乃けいろら記しかの家

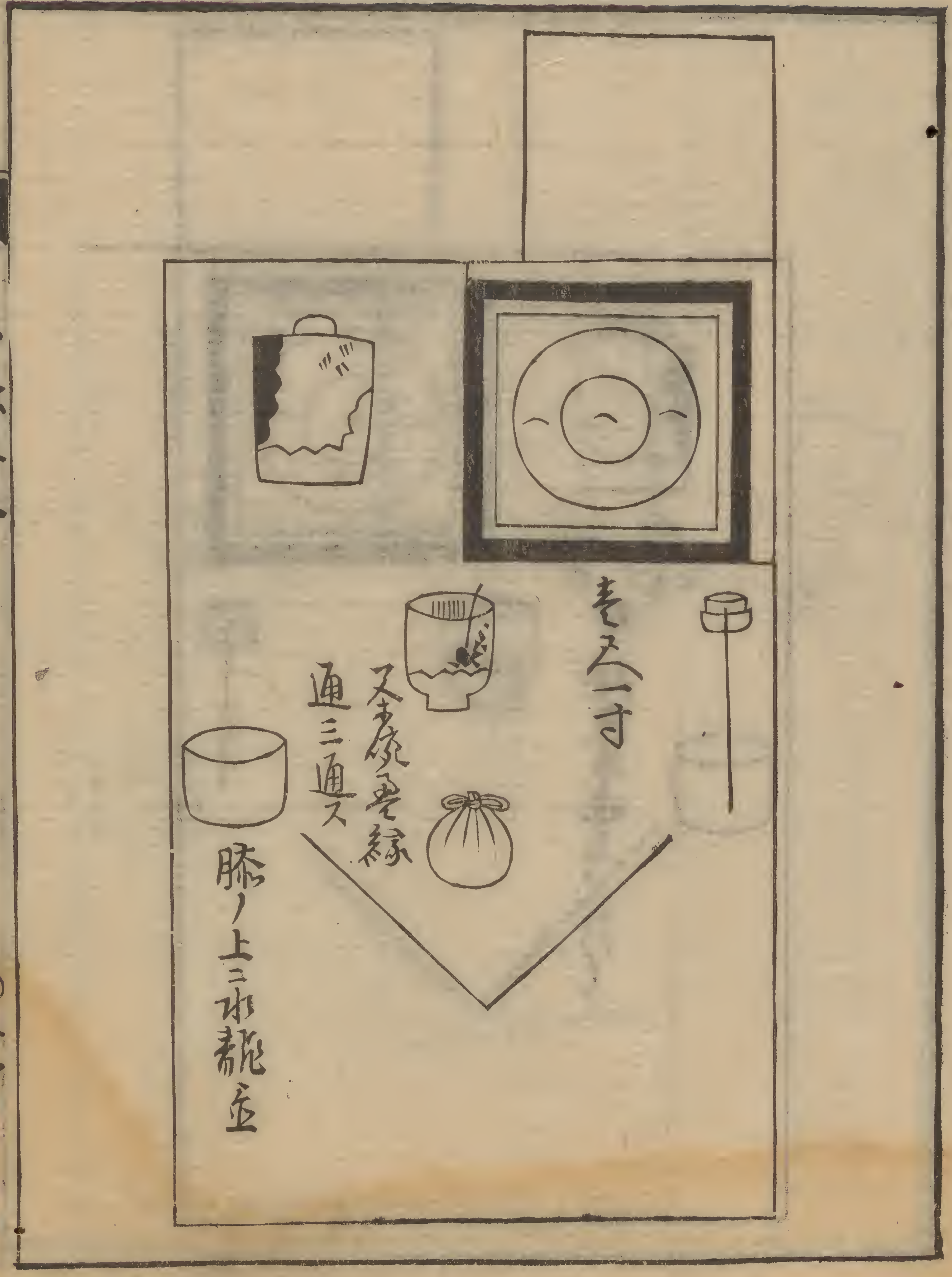
一 いはゆかんだきのまゆかくものを

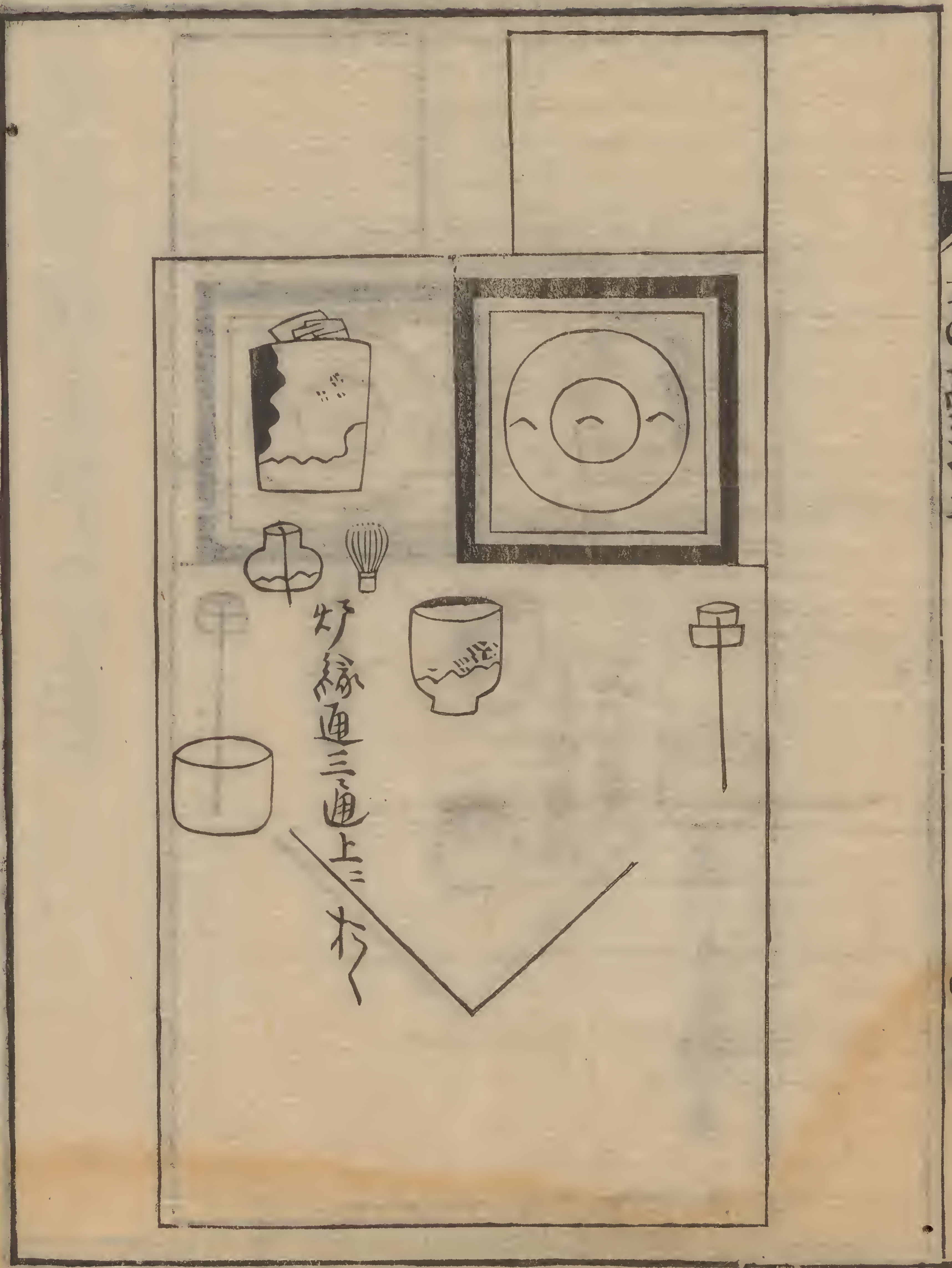
乃ころふろうろへ入置し

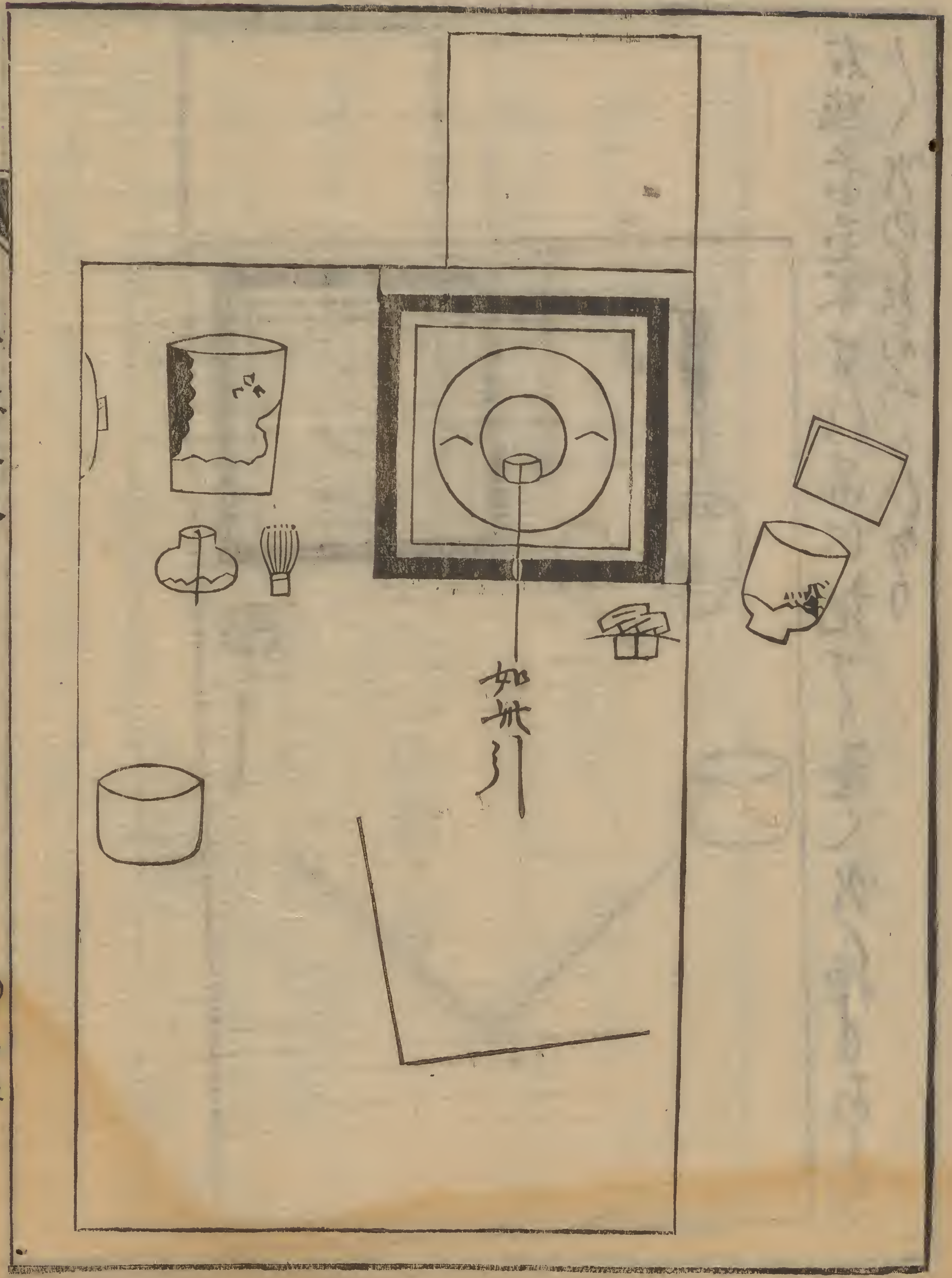
一盛床に掛物お茶立此に茶



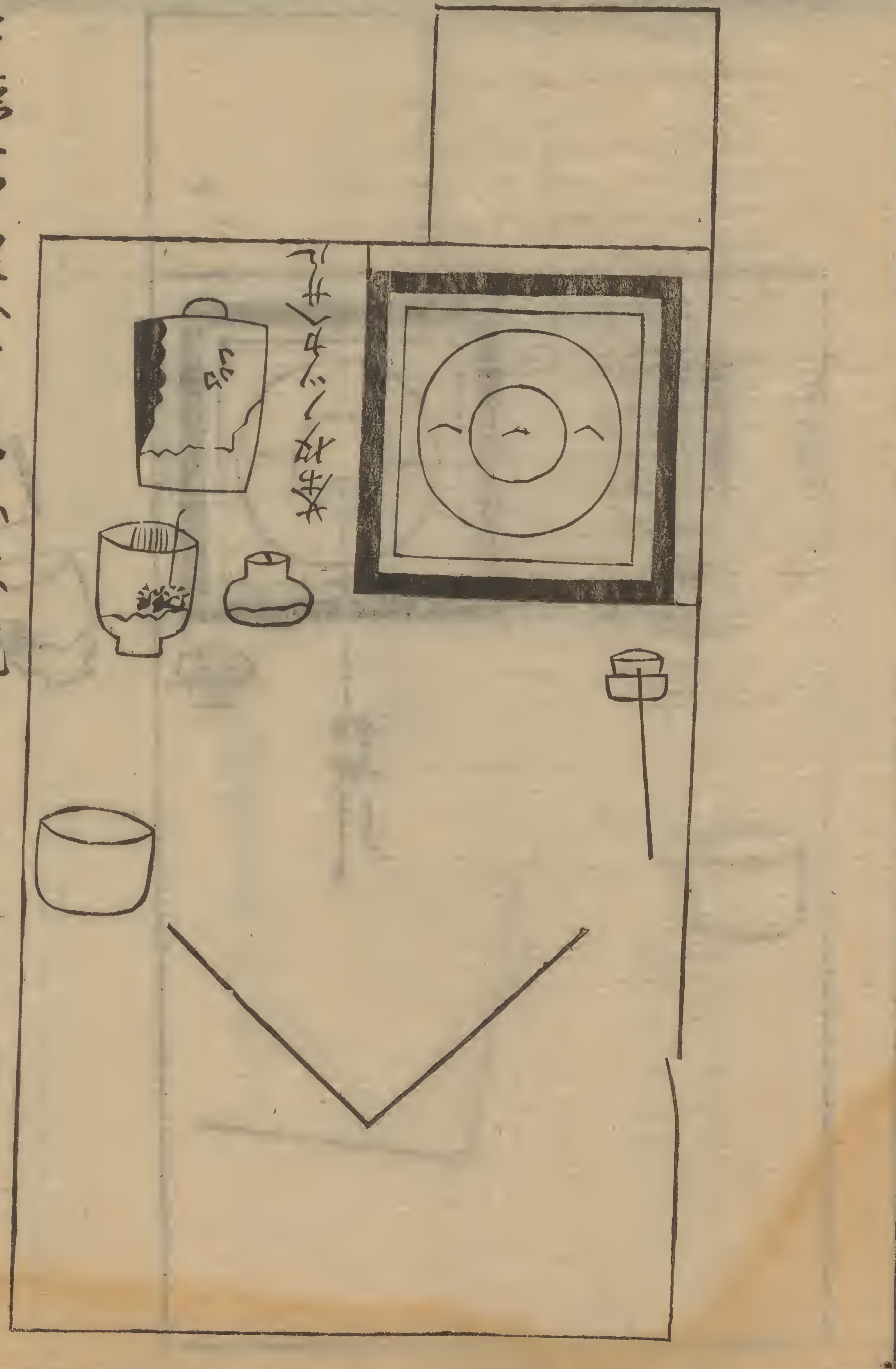

茶


壱尺一寸
又茶碗ヲ縁
通三通ス
膝ノ上ニ水指置

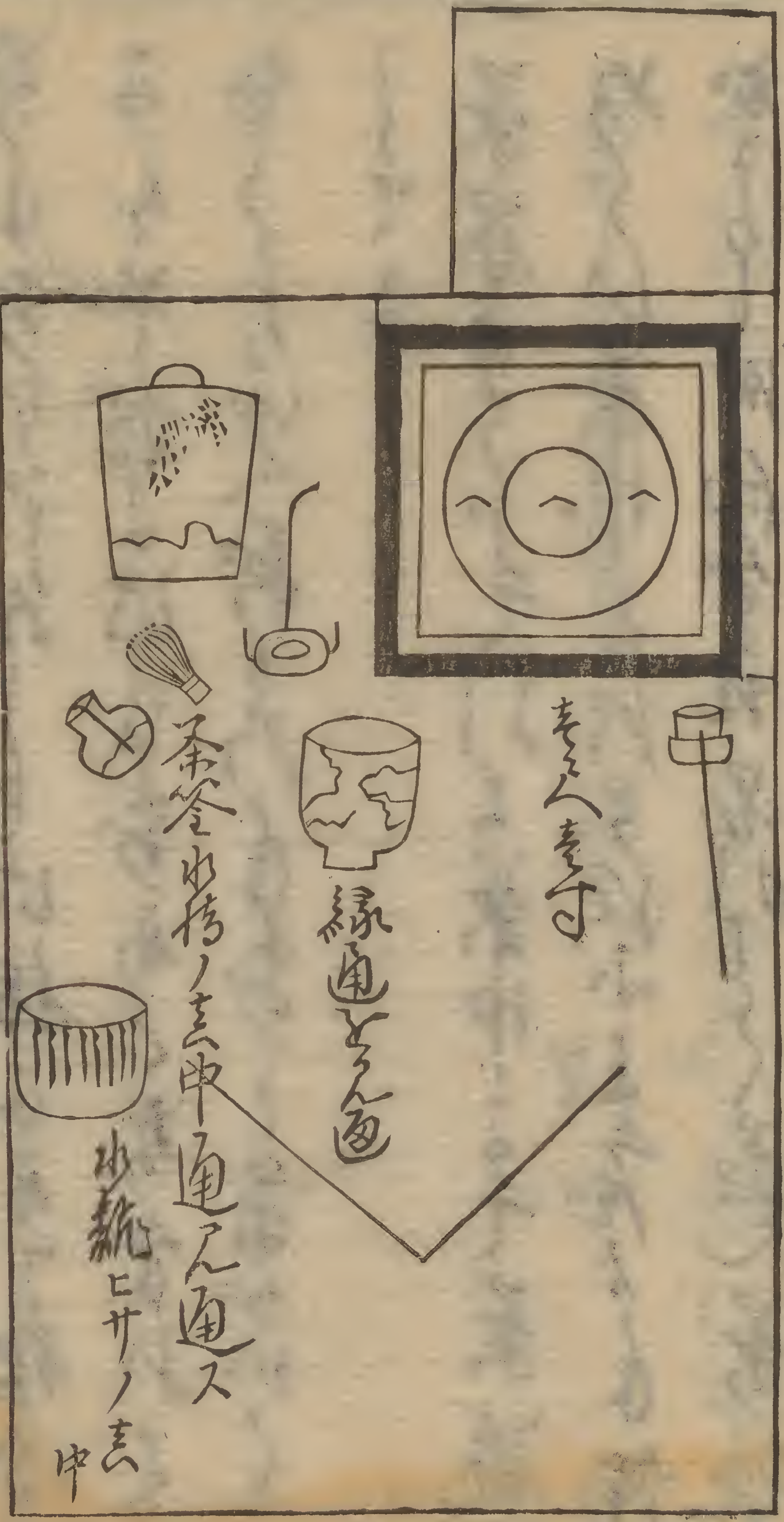

炉縁通三通上ニおく


如此引

右點前並茶才法易に把すゝ盃て水指にて取こゝろ
く水の和あつりひあり



一盆点順持にお炉座敷にて茶



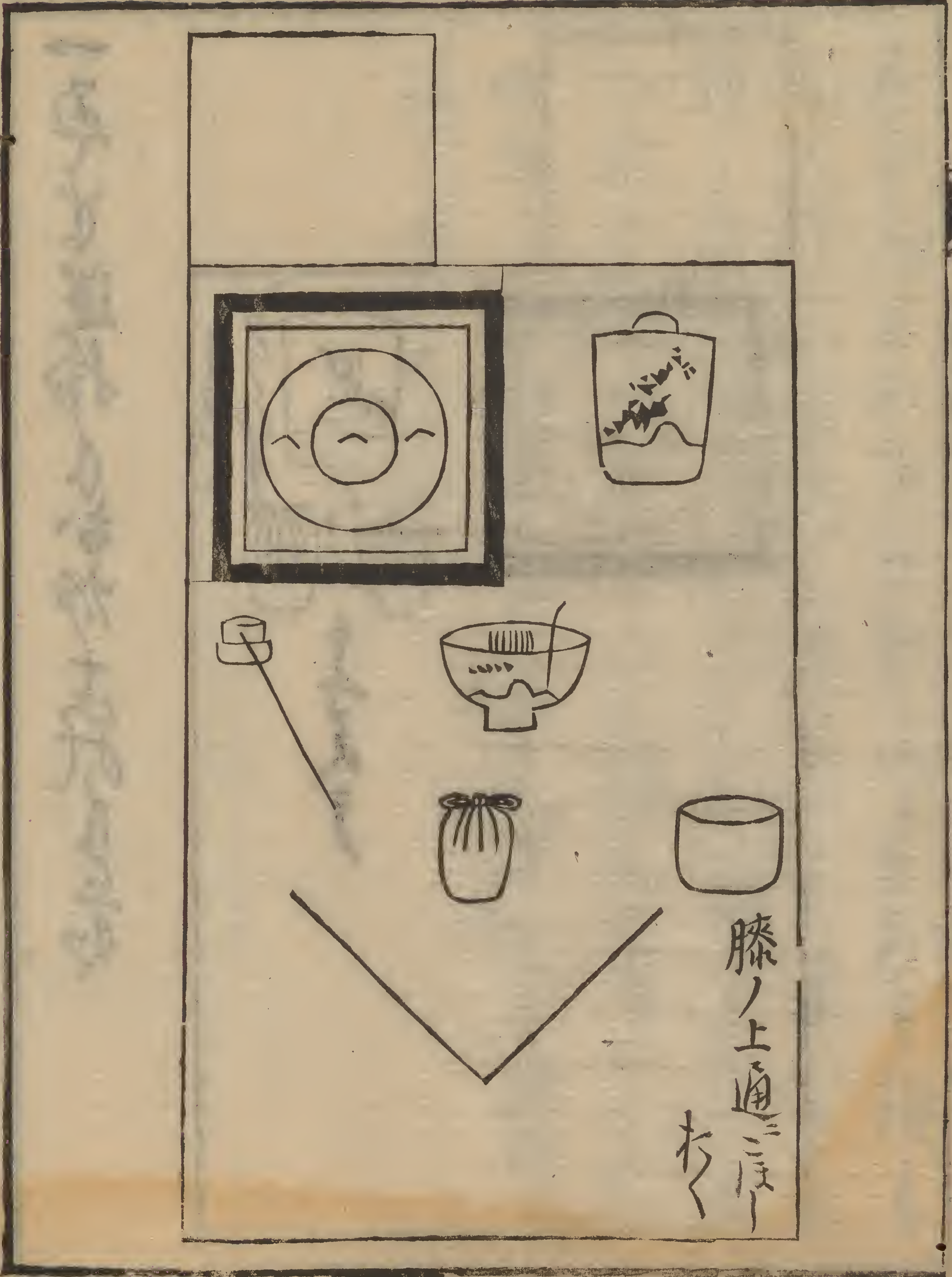
太おひ乃衣乃まへを細く順々にし乃
草(サウ)にあたる紙とし此縁にして夜合
にて是(ゼ)非(ヒ)にし此にあるなりされと
あしらひ人柄乃にあるに茶をかく
して云
一 茶巾をすゝぎてしぼり茶巾にて茶碗
のごひ茶巾をたゝみに正(シャウ)座(ザ)分に置
かさね附向を取出して置茶碗
の内を見て置きて後なり茶を点か
し又に置を出して置しそのかく点れ

ふうかうきりし
一 茶といふ茶器縁(リ)にて茶をのせ茶巾
を拭ひに茶器に茶入を縁におく
置し色を茶の通之

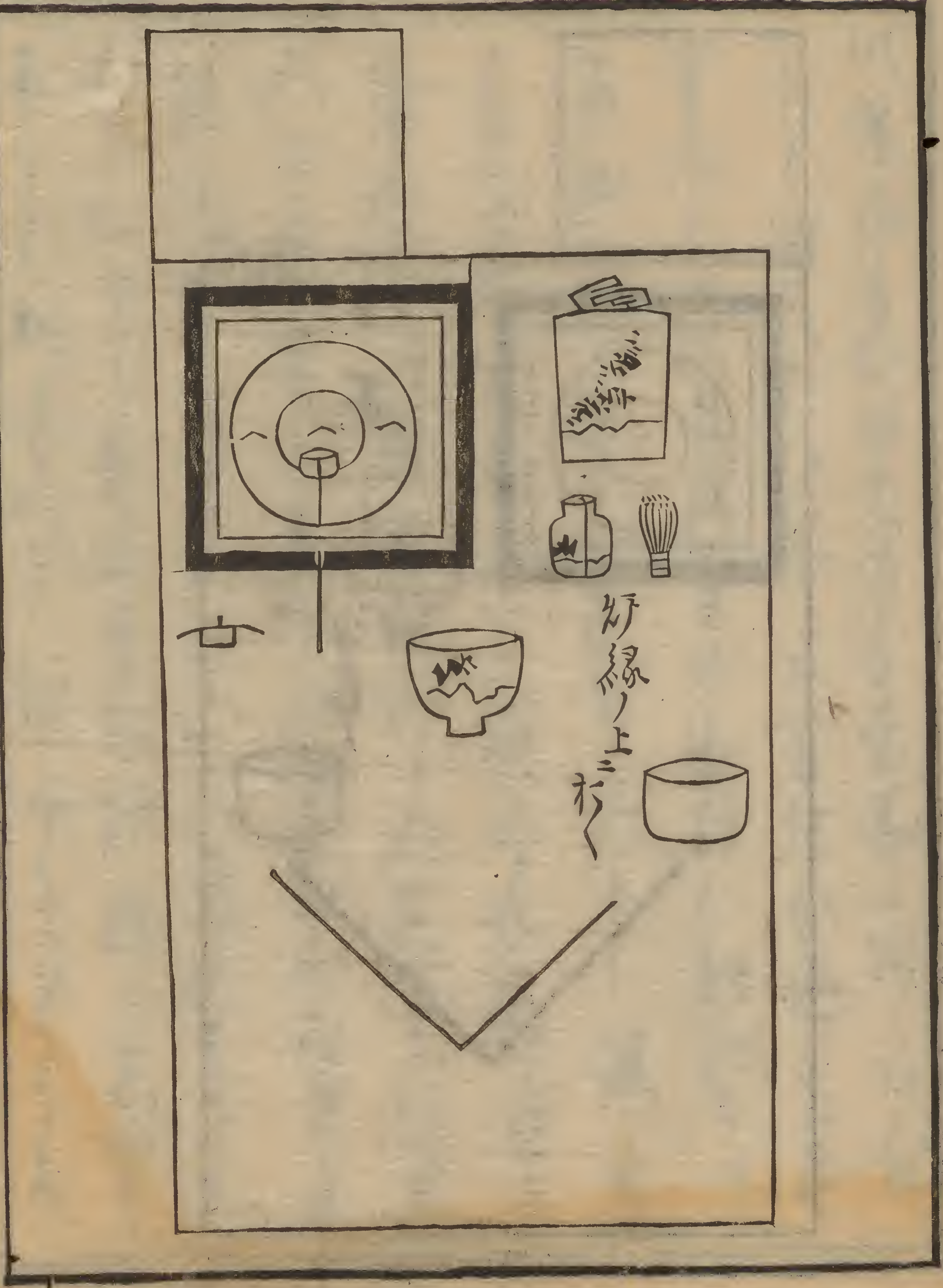
一 畳半次之角炉客付之図

右此棚ハ角炉棚乃よおよび縄にて
高ふ所に此ぬ通し寒ありても茶入にても
用し事之武者ぬけるく手掛をまのれ
へ武者高ろし罷のとく縁ふ置ずりも棠ふ
めてすしひかり又ハ所逡乃事とも附のよ
様しやよふ売てかよ

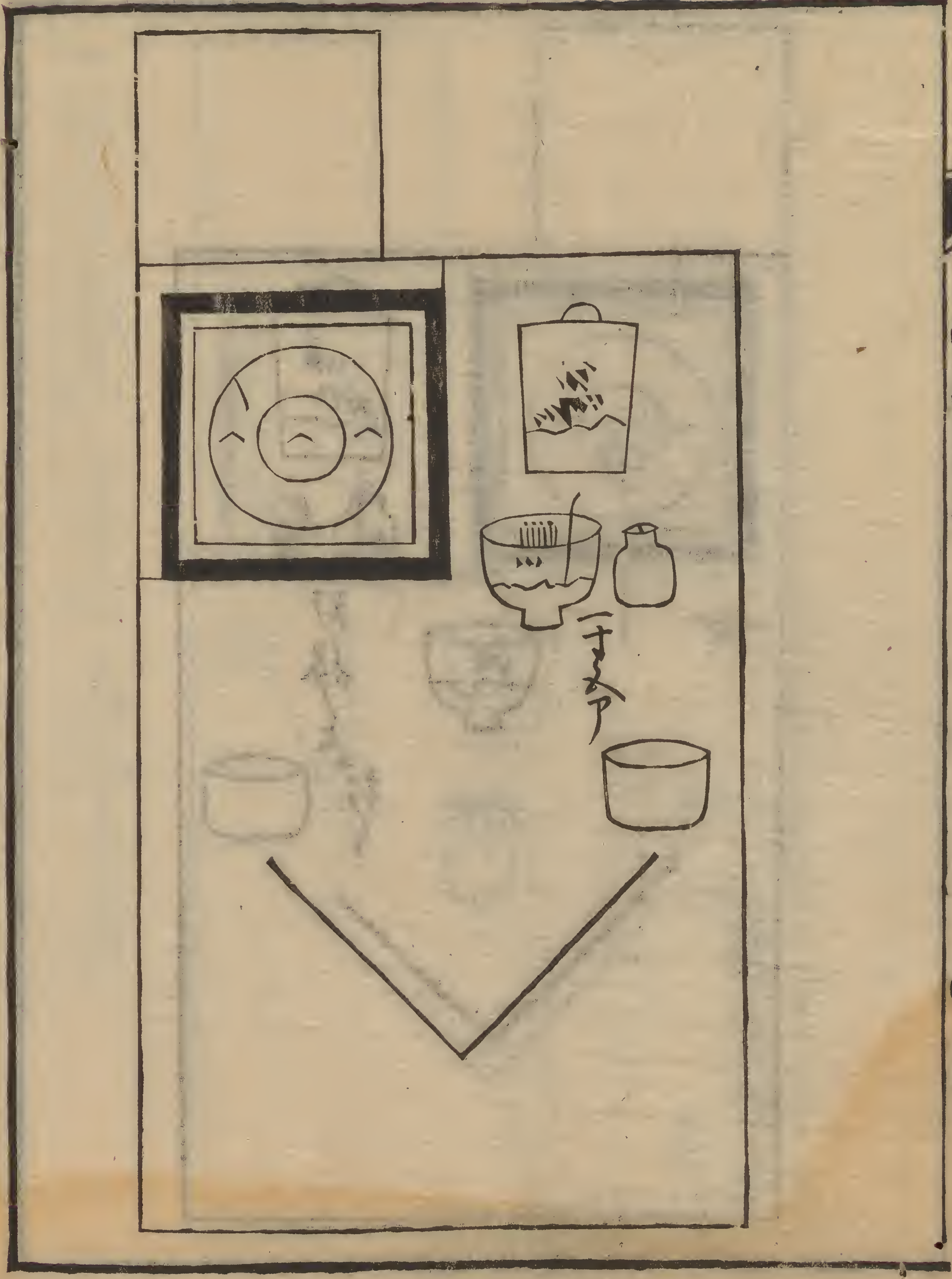
一違棚ハお炉蓋代ハ用



膝ノ上通ニほし
おく



炉縁ノ上ニおく



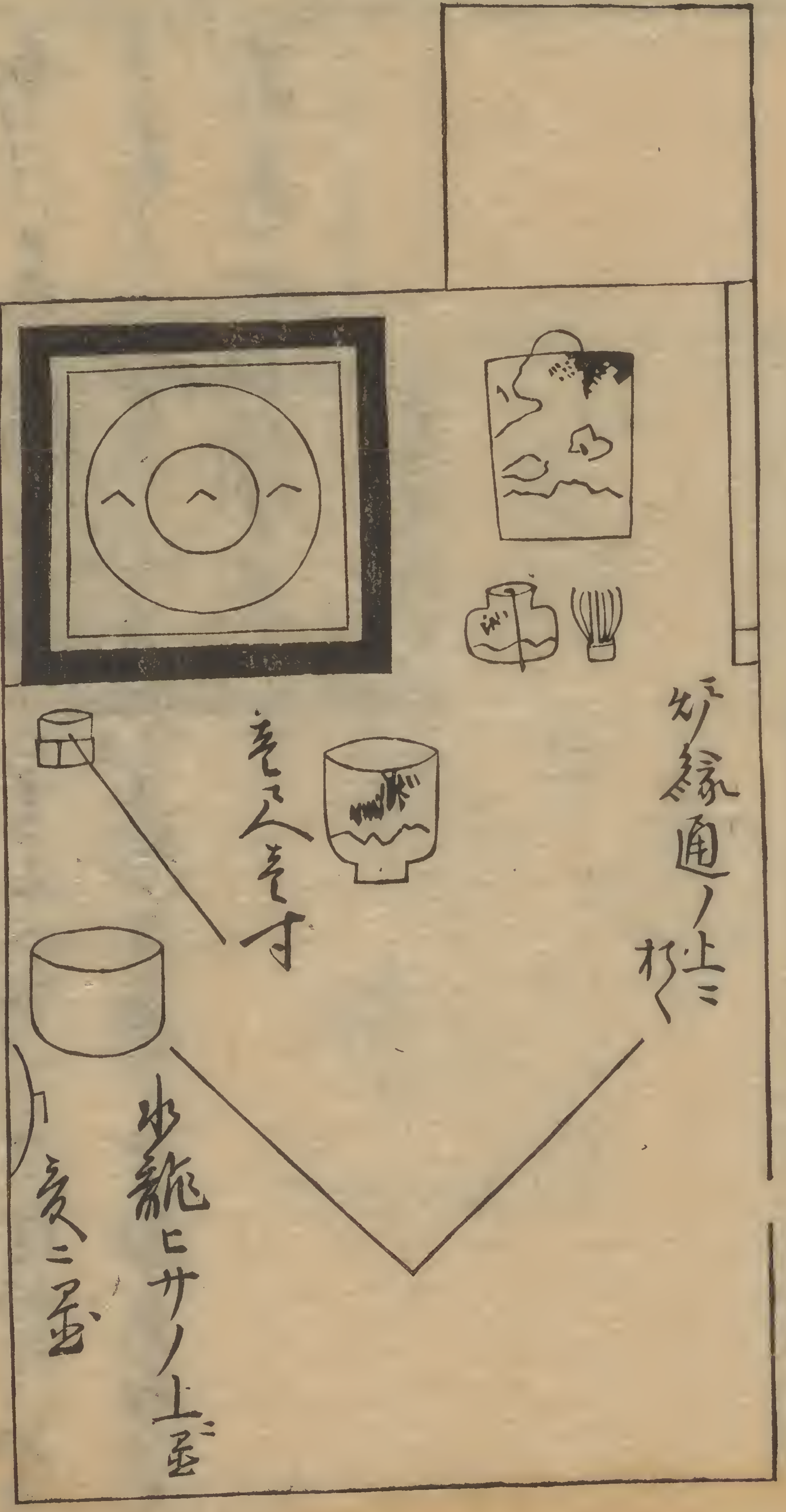
此逆勝手は出炉のま前図にかゝりあり
こゝし曲尺あひ取にも書付のごとく一畳
すゑくは此逆勝手の出炉は能知るへり
ふすまにしても子細はおもてにかはらし流儀
またおなじ花丹も夜の事前なりとも
事やそれぬれたる所の中に茶
入るは壺中よりとりおくと壺に古ありて
御遠とてもあるていしめのこともん
きていいまは菜椀茶炉縁と中
みしくかりくへしきしやくそうもうしよう

ありまたるかや口伝多し

一 四畳半逆勝手に角炉出したる所

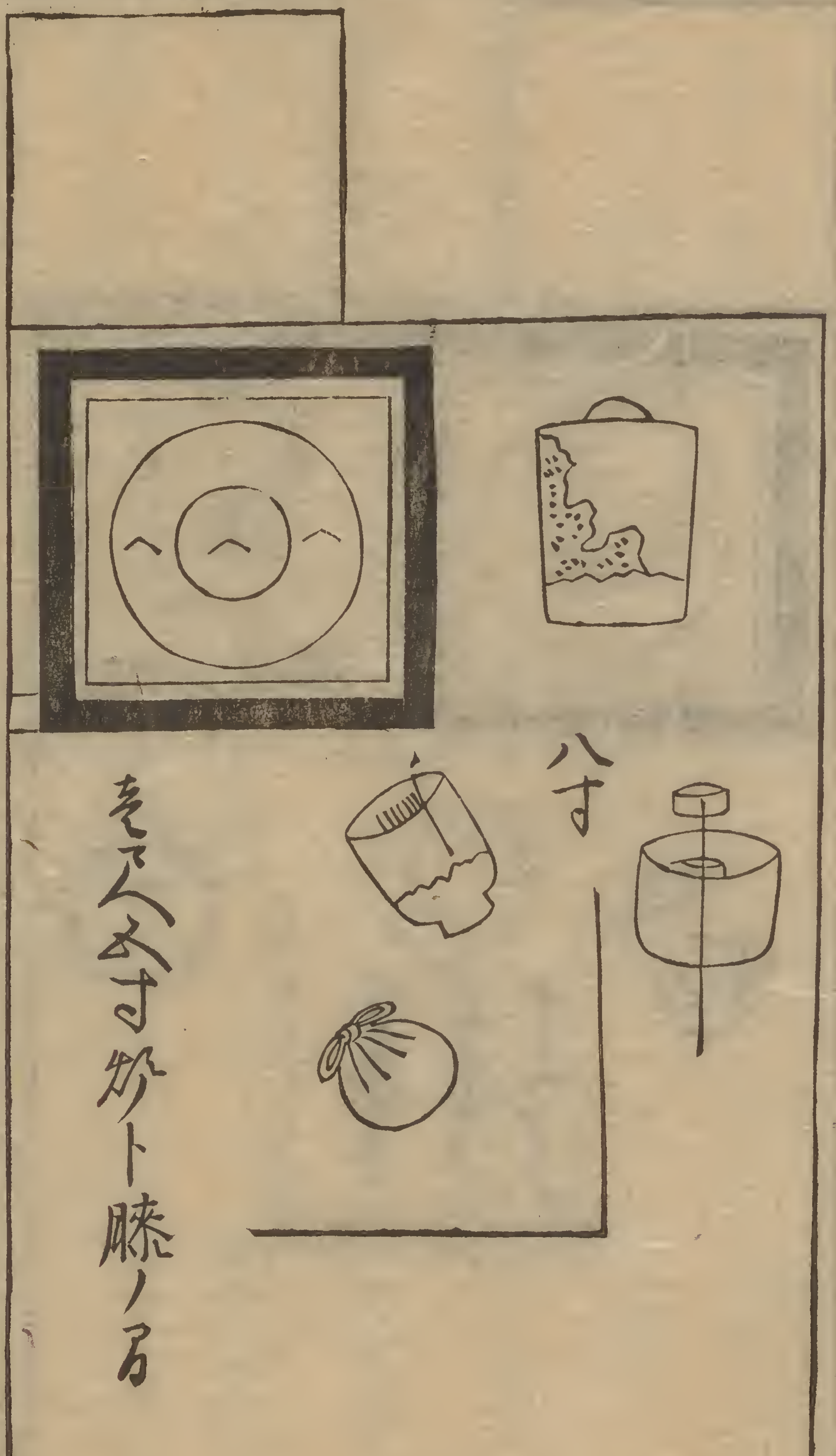
大通棚に角炉壺の台子の扁の記たるが
めしとやく置かたの台にて置くなり
台子常にかざる事なし

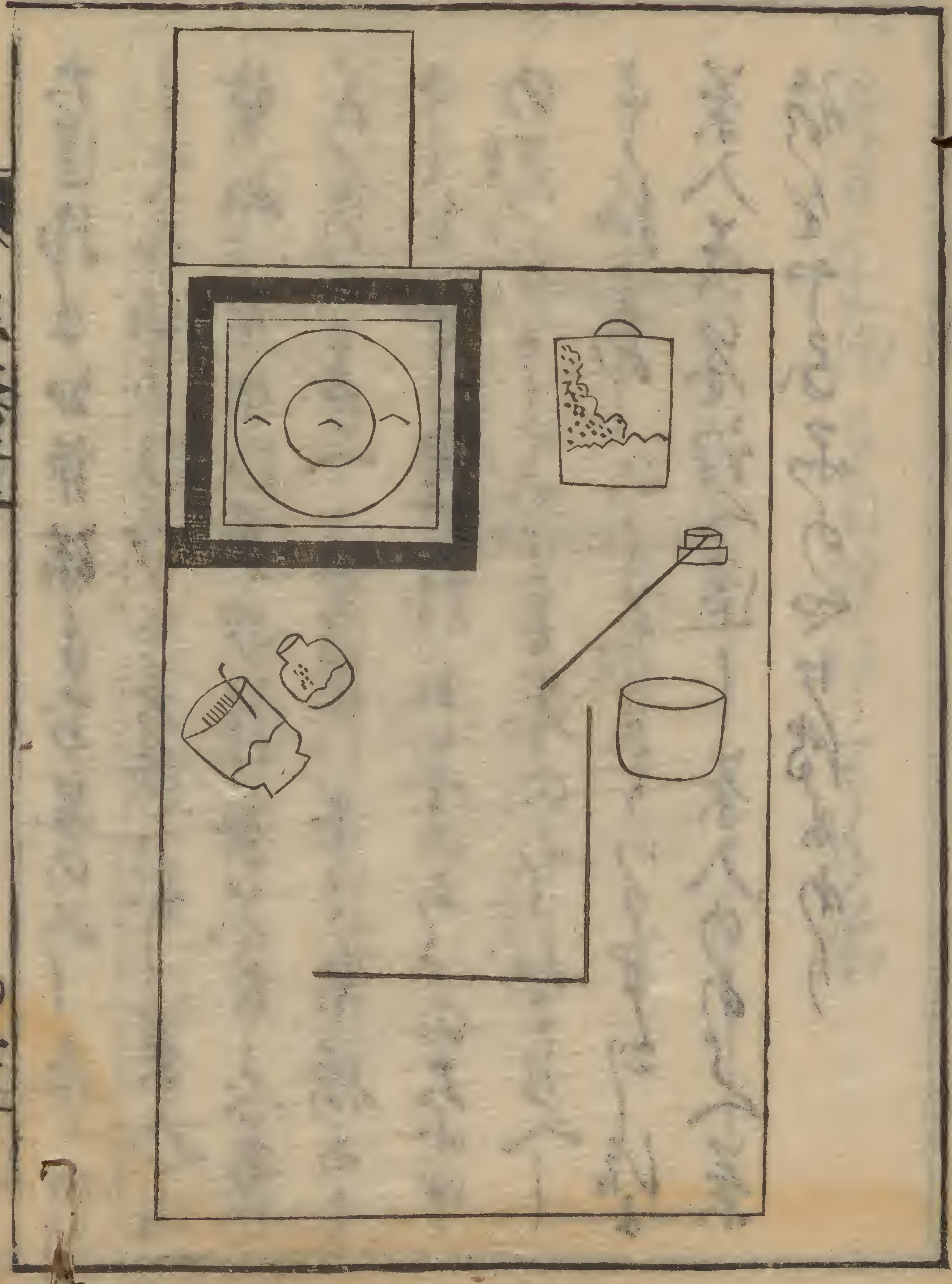
一通まわし棚に角炉壺の台茶

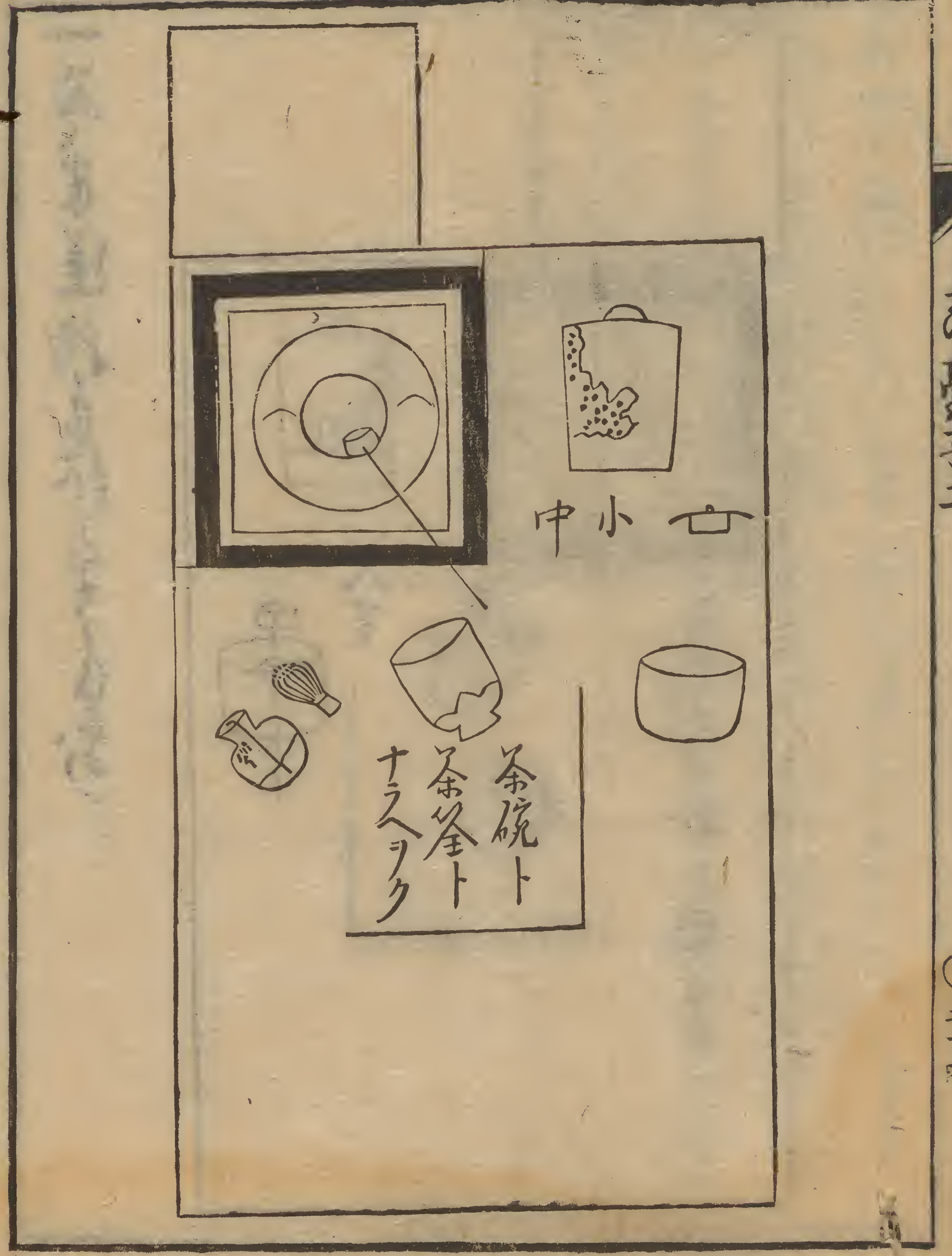


右此勝手乃角炉ハ上ゐゐかゝる事
多し尤ハ鉢（コボシ）を揚ゟ置ニへ置くる也以て出
上ニ而水差の蓋を取て通る而寄ヲ置
取あやし口伝多し

一無之逆勝手ニ而ゐまゝまの



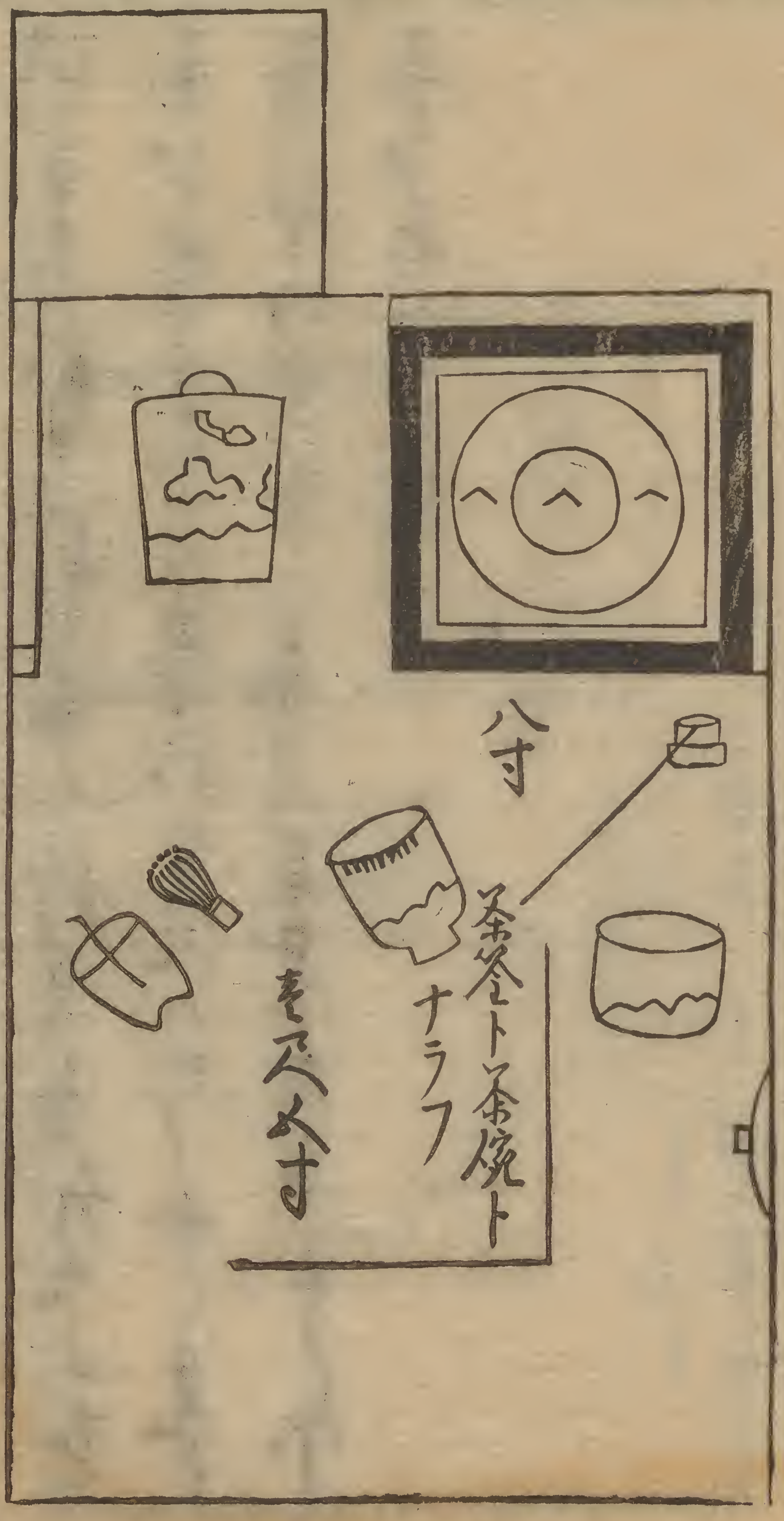




中 小
茶碗ト
茶釜ト
ナラヘヲク

大道具は如何様にも器の如し 居ともに
して茶碗の扱様を云 茶碗を出し 茶入を
袋ぬがせ 帛紗にて茶杓かけ茶入なをしべし茶巾
手前の茶入と茶碗引並べ 帛紗ふくみ
さしむかへ 竹箸を 釜のふたの大小中
の尺がね(ケンブン)をしてかざり 釜のふたを置べし
手前にあしのよしあしある事なり 湯は
茶入茶碗に入遣し 茶入のあと茶
碗をやすみあやしう仕様ぬあり

一 臺子道具は角物にして花



右逆勝手ハ向炉にしても客のとし
けしからにくくハかしやく竹を初めより
敷を知りしもうる者のかれハはしやく先と
茶碗の寸中と曲尺ヰ尺之迄をとを
よるあや口傳

一 逆勝手ハお炉左の寸法たとへ釈

右上星むかふの逆端より左へ會釈は角にかゝりはよ
同し仮紀あり四間半三間大尖も同し
串段あや似備え

指三手集　塩八ツ此習

四間半順端よ　塩　星の手お
四間半順端よ　塩　草の手お
四間半逆端よ　塩　星の手お
四間半逆端よ　塩　茶の手お
四間半逆端よ　右會釈(アエシラヒ)
三間大順端よ　塩　星の手お
三間大逆端よ　塩　星の手お
三間大逆端よ　右延答
一間半順端よ　角お　塩士の手お

一真半臺勝手夜の飾
一真半逆勝手角かね飾十三の飾
一真半逆勝手角かね飾にて十三飾
一真半逆勝手角かね飾十三の飾右合釈

已上八炉十三飾

此は十三飾ハ諸の飾の又は父母と
なる故に濃(コイ)茶(チヤ)も十三薄茶ハ指合點
も十三甚天目も十三其外ハ飾臺子
袋棚(クケ)栖(セイ)搨(ロウ)棚小傍屋自在續(クサリ)ホに
十三飾の印な事下も写臺子勝手に

逆勝手の飾ハ臺子袋草庵にハ棚物にかぎらず
十三飾ハ規(キ)矩(ク)の曲(カ)尺(ネ)ハ家々の大極
事也子細ハ三百八指飾ハ根本十三
飾より起(シコ)り一真臺子より飾の飾に
而も飾ハ順逆の差飾あれ共先師ハ
事十三飾の秘事とあされし事
派生(ミン)を極じまくの門弟大事と仕置へ
に傳ふべし

茶湯真之臺子二之巻終